

SF アクション映画 「科学忍者隊ガッチャマン」

Original story by 大岡俊彦 Original character by タツノコプロ

2013. 3. 28ver

ACT 1

8才の少年、鷲尾健。母は既に他界し、父一人息子一人の家庭だ。今日は日曜日。母の命日に供えるプレゼントを買うため、父と渋谷のデパートにでかけていた。

父は戦闘機乗りだから、健は戦闘機の模型をほしがった。だが父は戦争の道具である戦闘機を嫌い、曲乗りをするためのレシプロ機をすすめる。「雲を踏んだことがあるか」と父。宙返りの途中は、空が下に、地面が上になる。飛行機乗りだけが雲を踏むことが出来るんだと言う。そんな宙返りの楽しさを伝える、お前にはそんな飛行機乗りになってほしいと父は言う。

帰りのバスは混んでいた。スクランブル交差点のど真ん中に、バスが渋滞で止まったままだ。突如、全てのスクリーンが「ギャラクター」と名乗る仮面の男（ベルク・カツェ）にジャックされる。「我々は世界を恐怖におとし入れるテロ組織である。日本政府は、常に我々の要求をのむこと。これはハッターリではない。てはじめに、渋谷でバスを爆破して我々の実力を示そう」 バス内はざわめく。カツェのカウントダウン。「5、4、3、2…」 父はとっさに健をかばい、強く抱きしめる。「1… ゼロ」 健、父の乗るバスは、スクランブル交差点で大爆発する。

10年後。

テレビニュース。国際的テロ組織「ギャラクター」は、いまや世界連邦政府にとって脅威となっている。科学的テロを好むギャラクターの手口。彼らの脅しに屈服するかがG8の争点である。

次は、「渋谷スクランブルテロ事件から10年」のニュース。あの事件はギャラクターの宣戦布告の最初の事件であり、多数の犠牲者がでた。爆発事件のため、当時乗っていたと思われる5人の子供の遺体は最終的に見つからず…。

そのニュースを見ているのは、ジュン（18）。甚平（11）に「その5人がこうして生きていたとは誰も知らないけどね」

ここはテスト飛行場。レシプロ機が宙乗りの練習をしている。抜群の正確な操縦技術を見せるのは、18才になった健。健は宙返りの時、空が下に、地面が上になるこの瞬間が好きだ。「ひとつ、ふたつ…」自分の下にある雲を数える健。

飛行機から降りる健。3人は地下訓練場へ向う。地下に待つのは竜(18)とアラン(18)(※ ジョーではない。あとでわかる)。「おせえぞ健」「ごめん。天気がよくてつい雲を沢山踏んだ」「エースパイロットは呑気じゃのう」

ここは、科学忍者隊の地下訓練室。今日は連邦政府がお忍びで見学に来ている。科学技術庁長官、南部博士(48)が解説する。渋谷のバス事件で死んだとされる子供は、秘密裏に5人の科学忍者として訓練されていた。戸籍のない5人の孤児は、現代の忍者として育てられたのだ。

5人は戦闘用スーツ「ガッチャスーツ」を装着、格闘訓練に入る。科学忍者の科学忍者たるゆえんは、南部博士の研究成果、反重力を実用化したスーツである。南部博士の反重力理論、Gravity Armourized Control system for Central Harmonized Anti-field(反場の中央輻湊による重力武器化制御理論)の頭文字をとり、G.A.C.C.H.Aスーツと呼ばれている。

これは、ベルトのバックルにつくGマークを逆さまにすることで反重力を起動させ、わずか数秒ではあるが体重をゼロに出来るシステムだ。これを忍者の体術と組み合わせた驚異の空中戦闘法が、科学忍者、コードネームガッチャマンの最大の武器だ。

5人のスーツはそれぞれの得意技用にチューニングされている。万能型G1号「大鷲」を使う健。直線特化型G2号「コンドル」のアラン。旋回半径が小さく、回転やカーブに強いG3号「白鳥」のジュン。低空を飛べるG4号「つばくろ」の甚平。反重力を逆に重力向きに使って体重を増やし、打撃に乗せるG5号「みみずく」の竜。

5人はいまや特殊訓練を終了間際で、南部博士が「卒業」と認めたミッションまであと一週間だ。甚平は冗談を言う。「せっかくのヒーローなんだから、名乗りを考えようよ。『あるときは5つ、あるときはひとつ、実体を見せずに忍び寄る黒い影』なんてどう?」「黒い影じゃ悪者みたいだな」と健は却下。そもそも忍者だしねえと竜。

アランが健を宿舍の裏庭に呼び出す。彼はダーツの的を置いて射撃勝負しようという。俺たちは南部博士に拾われ、孤児として5人仲良く育ってきた。だがそれも終わりだ。オレは卒業したらジュンに告白するつもりだと。健もジュンが好きなんだろう?とアランは言う。どちらがジュンをモノにするか射撃勝負で決めようぜと。健はジュンを賞品みたいにするのが嫌だ、とその申し出を断る。

明日が卒業試験という日、川崎のコンビナートにギャラクターの巨大メカ「キングタートル」が出現する。自衛隊の戦闘機が出撃するも、そのモンスターの破壊力には勝てない。

連邦政府は科学忍者隊の出動を要請。南部博士は反対するが、卒業を前に、科学忍者隊は実戦デビューをすることになった。

5人は反重力エンジンを乗せたステルス機、「ゴッドフェニックス」号に乗り込み、炎上する川崎のコンビナートへ急行する。

初の実戦に緊張する5人。アランはバードミサイルの使用を提案する。やつは装甲が硬く、通常の砲撃ではダメだ。バードミサイルは誘導型のミサイルで、貫通して深く刺さり、粘性の高い液体を出し、固めてしまう(科学的トリモチだと甚平は茶化す)。誘導性のため、戦闘機で先にデジタルスコープを誘導する必要がある。俺が戦闘機で出る、という健を制止し、アランは「リーダーは残れ」と、戦闘機に乗り込み誘導役を買って出る。

自衛隊の戦闘機も巨大メカの砲撃に苦戦し、射撃チャンスはなかなかめぐってこない。健が一度訪れたチャンスを、「まだだ」と引きつけようとしたその刹那、アランの戦闘機が撃墜される。

キングタートルは示威行為が終わると海中に姿を消す。科学忍者隊のデビュー戦は、最悪のものとなってしまった。

宿舎に帰って来る4人。アランの私物を整理する。私物と言っても、孤児として育った我々には私物なんてない。

南部博士はこの責任を問われ、科学技術庁長官を解任される。

アランの葬式が執り行われる。泣きじゃくるジュン。ただこらえる健。科学忍者隊の正式デビューは、無期限延期となる。

裏庭で一人になる健。アランの残したダーツの的。

そこに刺さるダーツの矢。誰が放ったのか見ると、見知らぬ男。「南部博士に呼ばれた、アメリカから来た6番目の科学忍者」だと。6番目?聞いてないぞ。俺たちは5人だ。5人で一人なんだと。彼は一方的にアランのベッドを占領する。「コンドル」のスーツも彼が使うという。ふざけるなと怒る健。その男は皮肉を言う。「オレは役に立たないお前らの追加戦力として呼ばれた」と。名前くらい名乗れ、と言う健に、オレはジョー。コンドルのジョーだと彼は言う。

孤児として育ってきた俺たちの絆に、土足で入ってくるジョー(20)が許せない健。しかし、ゴッドフェニックスは5人の操縦者を必要とするのだ。アランが欠けた以上、ギャラクターという仇を倒すには、ジョーと組むしかないのだ。

ACT 2

コンドルのジョーの加入により、チームはぎくしゃくしはじめる。今まで仲間として育ってきた 4 人の輪に入れないジョー。ジュンは間を取り持とうとするが、健はそれが気に食わない。アランを殺したのはリーダーのお前じゃねえか、と毒づいたジョーに健は切れる。殴り合いをする二人。5 人はめちやくちやだ。

自分にやさしくしたジュンを見て、その唇をいきなり奪うジョー。お前に惚れたぜと。ジョーの頬を張るジュン。健は、その一件以来ジョーに心を開かなくなってしまう。

一方、科学忍者隊の秘密基地に、潜入者。ベルク・カツツェの変装である。

カツツェの通信により、ギャラクターの実行部隊が基地を襲う。科学忍者隊の秘密基地内での戦闘。科学忍者隊初の白兵戦である。5 人はバラバラのまま戦う。ジョーはダーツの名人であり、バードラン（科学忍者隊の手裏剣）で敵を次々に倒す。ガッチャスーツに慣れる時間もなく、格闘はジョーの弱点である。それをジュンがフォローする。形勢は劣勢。反重力装置の設計図など、ガッチャマンの優位性を保つ機密保持のため、南部博士はゴッドフェニックスを脱出させ、基地の自爆を図る。

科学忍者隊は本拠地を失った。南部博士の旧友のパイロットの持つ古い格納庫を借り、ゴッドフェニックス号の臨時基地とする。

その古い格納庫の扉を開けた健は驚く。父の赤いレシプロ機が眠っていたのだ。南部博士は父の友人の一人であった。父は戦闘機乗りであったが、このレシプロ機で宙返りなどの航空ショーもやり、人々に「レッドインパルス」として愛されてもいたのだ。持ち主を待ち続けるこの機は、二度と飛ぶことはない。健はメカニックに、自分の戦闘機の操縦桿に父の愛機のを流用できないか頼む。旧式だが、やってみよう。

一方、健はベルク・カツツェとの格闘の際、彼に発信器をつけていた。電波の解析が終わり、彼らのアジトが特定された。

科学忍者隊、ギャラクターの基地へ逆潜入せよ！

ギャラクターの秘密基地への潜入。総裁 X がこれに気づき、ベルク・カツツェ率いる精鋭部隊と直接戦闘。

大鷲の健の格闘術、コンドルのジョーのバードラン、白鳥の純のヨーヨー、つばくろの甚平のクラッカー、みみずくの竜のパワーファイト、それぞれのアクションの見せ場だ。5 人でひとつとなる、大技、科学忍法竜巻ファイターを出す、健とジョーの呼吸が合わず

威力は半減。

だが、この基地には何もなかった。ベルク・カツェがガッチャマンの実力を測るためのフェイクの基地だったのだ。テレビカメラが彼らの戦闘を記録していた。カメラに蹴りを入れるジョー。反重力装置の存在を知られたかもしれない。

再び出撃を待ちながら、訓練を続けるある日。

ジュンが資料を探していると、ジョーの個人履歴ファイルが出てきて、素性を知ってしまう。ジョーも実は孤児院の出身だった。7年前、アメリカの旅行中、両親をギャラクターに殺され、本名も分らないまま引き取られたアメリカの孤児院で育ったのだ。彼の攻撃的な性格は、後天的なものかも知れない。

健に相談するジュン。健は、このことは知らない事にしようと言う。俺がやつなら、知られたくないだろうから、と。

アランは君のことが好きだった。告白しようとしてた、とジュンに言う健。ジュンは答える。私が本当の気持ちを言うのは、科学忍者を辞める時。私は「白鳥のジュン」として、リーダー「大鷲の健」とともに戦いたい、と。

健は、ジョーの実力を認め、彼の戦闘法をフォーメーションに加える特訓を申し出る。ジュン、甚平、竜もそれにつきあう。

バードミサイルの誘導は俺がやる、と健は言う。射撃は誰がやるんだとみんな。ジョーに任せたい、と健。射撃の腕はジョーのほうがある。ジョーの射撃に俺の命を預ける方が、やつにバードミサイルを当てる確率が高くなると。

健の態度が急に変わり、ジョーは面白くない。俺は誰とも組まねえ、一人でやってきたんだと反発。どう生きてもいい。ガッチャマンであるときは協力するのが仕事だと思ってくれ。スーツを脱いだら自由にしろ、と健は言う。俺達が組むしかないんだと。

ベルク・カツェは、またも東京にキングタートルを出現させる。G8 の協力を拒む国を味方につけたらしいのだ。国際政治状況こみのテロリズムだ。キングタートル (MkII) は、反重力浮動装置とみられる動きが追加されている。むこうも、反重力を実用化している…？

アランの仇を思う健が、拳をにぎる。忍びは感情を押し殺さないとダメだが、こればかりは止められない。南部博士が、バードミサイルで動きを止めたとしてもあの装甲では破壊できないと計算する。「科学忍法火の鳥を使います」と健。

科学忍法火の鳥とは、ゴッドフェニックス号の反重力エンジンを最大出力にし、一旦成層圏まで到達、反重力を逆向きにして二倍の重力を発生させ、機体を反転させて真下へと

加速するのだ。空気との摩擦熱を利用し、高温のガスを気化、炎をまとったゴッドフェニックスは、最大加速で敵を貫き高温の熱で敵の装甲を溶かす。高温ガスの制御を 5 人でうまくやらないと、ゴッドフェニックス自体が燃え上がってしまう、危険な技だ。

火の鳥の冷却方法は不十分で、未完成だと南部博士は反対する。乗り込んでいる君たちの命の保証がないと。それに今の科学忍者隊は科学技術庁直轄から外れた、単なる私的軍隊にすぎないとも。

「じゃあアンタが出撃を許可すればいいんじゃないか？」と、ジョーが南部博士に。

「オレはやるぜ。その為に来たんだ」 ジュンも、甚平も竜も手を挙げる。

「博士、火の鳥の冷却については考えがあります。海上に誘導すれば、海水が使える」と健。

「…私は君たちを失いたくない」

「命を失いにいくんじゃない。ギャラクターに殺されるかも知れない、命を救いに行くんだ」健が言う。5 人の気持ちは同じだ。

メカニックのおかげで、健の戦闘機の操縦桿が父のものに取り換えられた。手に吸いつくように操縦桿がなじむ。これを握っていた大きな手は、健の命をかばって守ったのだ。

出撃の時が来た。ガッチャマン、キングタートルを迎撃せよ！ ラジャー！

ACT 3

健が戦闘機で出る。ジョーがバードミサイルのトリガーを握る。アランの戦死の記憶がよみがえり、緊張する 4 人。甚平のホバーにジュンも乗り込み、攪乱役と海上への誘導を買って出る。

キングタートルの砲撃は激しい。自衛隊の戦闘機も次々と落とされる。

パイロット技術を駆使し、宙返りしながら弾幕をよける健。集中すると、エンジン音と自分の呼吸音しか聞こえなくなり、いつしかその音も消える。宙返りの途中は、飛行機は雲を踏む。「ひとつ、ふたつ…」雲を数え始める健。「…むつつ」

照準がロックされた。今だ！ジョーがバードミサイルをぶちこむ。見事に命中！ 「ジョー、俺の判断よりコンマ 5 秒フライング射撃しやがる」「俺の狙いより速く飛ぶからだ」二人はケンカしながらも呼吸を一致させた。

いよいよキングタートルが動きを止めた！

戦闘機をゴッドフェニックスと合体させ、反重力エンジンのレバーを入れる健。

「科学忍法火の鳥！」

成層圏まで上昇するゴッドフェニックス。竜が機体を反転させ、反重力を下向きに変える。加速し、炎の鳥となるゴッドフェニックス。キングタートルの装甲を貫き、その下の海底につっこむ。海水で炎を冷やす。大量の海水が蒸発。その白煙の中から、ゴッドフェニックスは不死鳥のように現れる。

回収されたキングタートルの残骸から、核エンジンと旧式の反重力装置が回収された。ガッチャマンの反重力の秘密はまだ漏れていないようだ。今回の活躍により、南部博士は科学技術庁長官への復職を請われる。だが博士は断る。忍者とは、存在すら隠すもの。我々は戸籍を持たない秘密部隊としてやっていく、と。

地球連邦政府は、あらためてテロ絶滅を宣言。ギャラクターとの対決を選択する。

ジョーはこの任務が終わったので、元の家に戻るという。その別れ際。

「健。お前、俺が孤児院出身って知ってて黙ってたろ」とジョーは皮肉っぽく言う。

「お前のプライドを守ってやったまでだ」と応じる健。

「ちっ。可愛げのない言い方をする奴だぜ」

「次の任務の時には、ちゃんとかけつけろよ。いつでもお前のベッドは空いている」

「…あれは、アランって奴のを借りてただけだ」

「いや、あれはコンドルのジョーのベッドだ。お前のために空けておく」

「…」

強がりながらも、はじめて微笑むジョーと健。

とあるギャラクターの基地に潜入する5人。

「お前達は誰だ！」と問われ、健は名乗る。

「あるときは5つ、あるときはひとつ、実体を見せずに忍び寄る白い影。

科学忍者隊、ガッチャマン！」

ドン、と暗転、「科学忍者隊ガッチャマン」のタイトルロゴ。

流れる主題歌は、もちろん子門正人のオリジナル版。エンドロール。